私が暁の翼を駆って、海の果てに住んでも

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-10-19 キーワード (Ja): キーワード (En): Tohoku Gakuin University 作成者: 藤原, 佐和子 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24778

私が暁の翼を駆って、海の果てに住んでも

大学宗教主任　藤原佐和子

詩編　一三九篇一～一〇節

1主よ、あなたはわたしを究め
わたしを知っておられる。
2座るのも立つのも知り
遠くからわたしの計らいを悟っておられる。
3歩くのも伏すのも見分け
わたしの道にことごとく通じておられる。
4わたしの舌がまだひと言も語らぬさきに
主よ、あなたはすべてを知っておられる。
5前から後ろからもわたしを囲み
御手をわたしの上に置いていてくださる。

6その驚くべき知識はわたしを超え
あまりにも高くて到達できない。

7どこに行けば
　　あなたの霊から離れることができよう。
どこに逃れれば、御顔を避けることができよう。
8天に登ろうとも、あなたはそこにいまし
陰府に身を横たえようとも
　　見よ、あなたはそこにいます。
9曙の翼を駆って海のかなたに行き着こうとも
10あなたはそこにもいまし
御手をもってわたしを導き
右の御手をもってわたしをとらえてくださる。

この春、京都の大学からまいりました藤原佐和子と申します。神学研究をやっておりまして、このたび文学部総合人文学科の教員として、宗教部のメンバーとして迎え入れて頂きましたこと、ほんとうに感謝に思っております。

ちょうど一ヶ月前に仙台に引っ越してきた時は、やっぱり「寒いなぁ」と思いました。京都弁で言うところの「さっぶいさっぶい」という感じです。ですが、先週あたりから至るところで、色とりどりの花や桜が咲き始めました。今週にはいよいよ、春っぽい気持ちになってきましたし、街行く人々の服装だって、どんどん春らしい感じになってきていると思います。

私の研究室から大きな木が見えるのですが、この礼拝堂の前の桜は満開だというのに、いつまでも葉っぱがなくて枯れ木のようでした。最近になって、やっと新芽が芽吹いてきているのを見つけて嬉しくなりました。植物というのは、ちゃんと「春が来る」というのを分かっているし、ちゃんと春が来るのを分かるように、神様が作っていてくれている、準備しておられるのだな、ということが分かる気がするからです。

さて、春というのは、「始まり」の季節であります。泉キャンパスは新入生でいっぱいですし、住み慣れたご実家を離れて、新生活を始められた方もおられることと思います。二回生の方でしたら大学生活にも慣れてこられて、これからどのようなことを専門的に学んでいくのかの模索に、

いよいよ本腰を入れて取り組まれる時であるかと思います。

ですが、「始まり」というのは、常に何事かの「終わり」でもあるのではないでしょうか。例えば、これまでの高校生活の終わり、地元での暮らしの終わり、そして、数年後には、泉キャンパスでの学生生活の終わり。さらにその先には、大学生でいるということそのものの「終わり」を予感する春でもあるのではないかと思います。

私にしましても、長いこと住んできた関西での生活が「終わり」を迎えました。今、心の底から関西弁が恋しくて、電話しまくっています。「お兄ちゃんの頭の毛な、三本がパァーッてなんねんで」というＣＭにさえ癒されるかのようです。ですが、それでも尚、一つの「終わり」とは新しい「始まり」、新しく変わっていくこと、変えられていくことのチャンスであると思うのです。

今日は私の初めての礼拝担当ですから、どんな聖書箇所を選ぼうかなと考えました。そこで、私の一番お気に入りの箇所の一つ、ワン・オブ・ザ・ベストをご紹介することにいたしました。先ほどお読みしました詩編一九三篇は、私が大学受験を終えて、高校を卒業する頃に選んで、それ以来ずっと大切にしているものです。

私は高校卒業後、東京のキリスト教主義大学に行きました。一回生のときは、ここでいう泉キャンパスのような、いや、もっと遠い郊外の山の上にあるキャンパスに行かなければなりませんで

した。高校生活とはだいぶ違います。それから大学生になったら、煩わしい校則からリリースされて自由になるという「良いこと」のある一方で、ホームルームはありませんし、担任の先生もいませんし、「色々と違うんだなぁ」ということが分かってきます。自分から動かないと、友達もできないし、情報も手に入らないし、なんにも起こらない、面白くない、ということに気づきました。当時はまだ実家暮らしでしたが、通学に片道二時間かかりましたので、距離的にも心理的にも、自分のかつての生活から大きく、遠く、「離れてしまった」と思いました。

私は高校三年生のときに、良性腫瘍をとる手術したことがあるのですが、術後、何回かは、父や母が高校に車で迎えに来て、早退して、大きな病院での診察に付き添ってくれました。でも今や、何かの時に家族にすぐに駆けつけてもらえる距離ではないのです。これまで見守ってくれていた先生たちもいません。なんだか、かつての生活からポーンと放り出されて、まるで追放されてしまったかのような気分を数ヶ月間、抱えたまま過ごしました。

ですが、そんなときに私はふと、「実は今まで、自分は守られてきたんだ」ということに気づきました。それも、いろんな人たちを通して。それも、私が気づいているところでも、気づいていないところでも。私は、私たちは、ほんとうは守られてきた。そんな風に思えるようになってから、実は、何か一つのことが「終わり」を迎えて、なんだか自分一人が追放されてしまったよう

に感じる時があるけれども、また自分から動いていければ、いろんなことにアプローチしていけば、世界がどんどん回りだすということも次第に分かるようになっていきました。

一番遠いところでは、タイ北部のチェンマイという古い街に住んでいたことがあります。最初の頃は、標準タイ語も片言レベル、現地のチェンマイ語もよく分かりませんし、正にポツーンという感じです。でもそこでだって、新しい出会いがたくさん与えられました。きっと「終わり」と「始まり」はセットになっていて、変化していく、変わっていくということが、日々、新しい私たちを作っていくのだと、神様が日々、私たちの前に道を作っていて下さるのだと私は思います。

詩編一三九篇が私たちに伝えようとしているのは、私たちがどこに行っても、ものすごく遠く離れたところに行ったとしても「神様の手の中や」ということだと思います。決して忘れられたり、置いてけぼりにされたり、無視されたりはしないのです。私はかつて「神様は私のことを忘れちゃったのかな」と思ったこともありましたが、実は、正にその時、私がようやく神様を思い出したのであって、本当はずっと、「神様の手の中」にいたのだと思います。

「終わり」と「始まり」はセットかも、ということは、言い換えれば、「追放」と感じられるようなことだって常に「祝福」とセットなのではないかということになります。創造物語で人間が神様を裏切ってしまったとき、神様はめちゃめちゃ怒って、二人をエデンの園から「追放」しま

す。二人は知識を得てしまったので、それまで裸でいても平気だったのに、それを恥ずかしいと思うようになっていました。神様は、怒りまくって二人を「追放」するのですが……。ここがほっこりするところなのですが、動物の皮で衣を作って二人に着せてあげるのです。聖書には、そういう物語があります。やはり、追放が祝福で、祝福は追放なのかもしれません。

もしかしたら皆さんもいつか学生生活を終えたあとで、実は大学でも友達や、サークルの仲間や、教職員の人たちなどから大切に守られてきたのかもしれないと感じるようになるかもしれません。しかし、それでもまた必ず、新たな導き手や仲間が与えられていきます。

オルガニストの坂上先生に「わがゆく道、いついかになるべきかはつゆ知らねど、主は御心なしたまわん」という讃美歌を奏楽して頂きました。私たちがどこに行っても、たとえ故郷から遠く離れても、神様はずっといたはるし、むしろその祝福から逃れることはできない。この先、どこでどのように生きていっても、きっとだいじょうぶなのだと思います。祝福は、いつまでも私たちを追います。なぜなら、神様の祝福の外で生きるということは、きっと不可能だからです。